90歳代で著書多数／最期まで草木を慈しみ

庭園と建物を寄贈した故・小林清子さん

“裏高尾のターシャ・テューダー”と呼ばれて

小林邸時代のガーデン（2008年）

随筆集「相模野」出版と傘寿を祝う会で（1990年2月）

1面から続く

寄贈者の故・小林清子さんは95歳まで「裏高尾診療所」の看板を掲げ、近所の人のホームドクターとして住まいの一室で診察を続けた。90歳を過ぎてからも随筆集を次々に出版。92歳で「いつ死ぬかわからないから」を、94歳で「安心して死ぬこともできない」を、そして97歳で「ありがとうございました」を、99歳で「私は百歳」。他にも句集や歌集も遺している。

清子さんは岡山県出身。東京女子医学専門学校（現・東京女子医大）卒業。夫・小林郷三さんは、相模原市大戸付近の出身で、13代続く医家に生まれた医師。1927（昭和2）年に独力で開設した「小林病院」は、八王子市で初めての精神病院だった。清子さんは4人（2男2女）の子どもを残して妻に先立たれた郷三さんの後妻となり、戦前戦後の苦難を潜り抜けてきた。1969（昭和44）年故あって郷三さんは病院経営から退くことに。病院とその敷地も手放した。

その後の失意の日々を共にし、1987（昭和62）年に93歳で看取るまで、清子さんは10年近く介護に追われた。郷三さんに見せたくて草木を慈しみ、〃裏高尾のターシャ・テューダーみたい（アメリカの人形作家で園芸家として知られる）〃と言われたこともあった。

今、室内を見回してみると、清子さんがいかに家屋敷を大事にして住んできたかが伝わってくる。「雨戸が階下だけで30枚近くあるから、朝夕の開け閉めが一仕事」「植木屋さんの支払いに毎年300万円もかかる」と、近しい人にはもらしていた。「売り払って介護付きマンションに移り住めば」と勧められても、100歳で亡くなるまで一人暮らしを続けた。

2003年4月、朝日新聞の「折々のうた」で取り上げられた「花はわれか吾は花かや花吹雪」を辞世の句と定めた後も、最期まで句作を続けた。

著作の数々

高尾駒木野庭園

開園時間／4～8月＝9時～18時。9～10月＝9時～17時。11～3月＝9時～16時。年末年始を除いて無休、入場無料。問い合わせ先／指定管理者・駒木野庭園アーツ☎042・663・3611。

【喫茶室メニュー】梅（または柚子）ジュース&おかきセット400円。アイスコーヒー350円ほか。